



フィールドで考える

また、夏がめぐってくると

高橋 絵里香 (たかはし えりか)

東京大学大学院総合文化研究科

二人の同室者たち

フィンランド西南部の福祉施設で調査していたわたしは、地域の年金生活者のキャンプに毎年参加していた。ここでともに時間を過ごした人びとは、以後も何かとわたしを気にかけてくれた。祖母が四〇人近くまとめてできたようなものである。だが、一年目と二年目のキャンプで同室だった二人のおばあさんは、わたしのことをもはや覚えてはいないだろう。

当時、ヒルダはその町の中心に位置する住宅街に一人で暮らし、エルマは「白樺の郷」という保護住宅に一人で暮らしていた。彼女たちは二人とも認知症を発していたのである。キャンプのスタッフがわたしに彼女たちと同室を割り当てたのは、ベッドメイキングなどの作業を手伝わせるだけでなく、何事か問題が起こったときのためだろう。

一瞬たりとも目を離してはいけない。わたしはそんな風に思い込んで、到着した彼女たちが荷物をほとくのを緊張しながら手伝った。最初のうち、わたしのつたないフィンランド語で会話する限りにおいて、彼女たちの受け答えに不自然な部分は見つからなかった。だが、すぐにおかしなことが起こった。

居室前の廊下に掃除用具置き場があったのだが、ヒルダとエルマはいつまでももうキャンプにも来なくなってしまった。彼女たちと顔を合わせても、わたしのことは忘れていた。それでも、女学生のよ

その前に立っている。何をしているのかと尋ねてみると、エレベーターを待っているのだと言った。キャンプセンターは平屋で、掃除用具置き場の扉もごく普通のものであったのだ。

なるほど、これが「チホウ」というものか。以前にも、もつと深刻な認知症を抱える人びとと接する機会があった。それでも彼女たちを身近に目にする、胸がつまるような感覚におそわれる。例えば、一見すれば他のお年寄りたちと変わらない小綺麗な格好をしているが、じつは二人とも毎日同じブラウスとスカートなのだ。思い返してみれば、彼女たちの靴は驚くほど小さく、他に服をもっていない。キャンプに来る前に誰も荷造りを手伝ってくれる人がいなかったのだから。

フィンランドでは、お年寄りが自分の子ども世代と同居することは日本に比べて非常に少ない。たとえホームヘルパーが面倒を見ていて、昼間はデイケアに連れて行ってもらうとしても、彼らはふだん一人で暮らしている。わたしにはそれが、何だか気の毒なことに思われた。

月日が経つことの意味

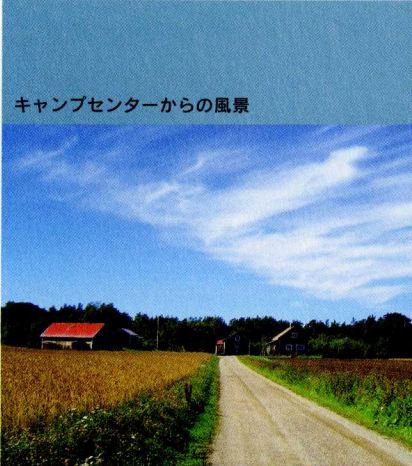
しかし、キャンプの参加者たちはゲームや歌といったさまざまな娯楽をとにも楽しむ。聖歌だけではなくさまざまな

フォークソングを歌い、子どものころに覚えた詩を朗読する。詩をもつともよく暗誦していたのは、認知症のほすのエルマだった。

他のキャンプ参加者たちにとっても、二人は、毎日の献立を論評し合い、一緒に散歩をする同じキャンプの仲間だった。毎年顔を合わせるたびに、お互い少しずつ年を取り、メンバーの誰かが減っている。それでも彼らは、身体が許す限り皆で参加したいと、キャンプを一年でもっとも楽しみにしているのだ。

確かに、「古い」への不安は常に水面下にあつて、キャンプの期間中にもときおりあらわれてくる。リディアというおばあさんが、蝋燭の消し忘れて最近アパートに小火を出したらしく、キャンプのスタッフに泣いて不安を打ち明けている姿を目にしたことがある。前年まで元気な様子でキャンプに参加していた様子と比べながら、彼らにとって月日が経つことの意味の重さをわたしは実感したものだ。

だが、わたしたちは皆、老いていく。誰もが不安を抱え、ときには独りで、ときには仲間と、日々を過ごしている。キャンプの期間中、お年寄りは「消化のために」と食後にセンターの周囲をぐるぐると行進する。施設を何周もする元気な人もいれば、すぐベンチに座り込んでお喋りを始める人もいる。それはまるで彼らの青春時代を想像させる情景で、「チホウ」や「健常」



キャンプセンターからの風景



キャンプセンターの裏庭で、シーツを細く裂いて包帯を作っている。インドに寄付するらしい



クリスマス行事で福祉施設を訪問する若者たち



市街の高層住宅に住む一人暮らしのお年寄りたち。デイサービスセンターに集まりくつろぐ